

## 2月5日 年間第5主日

ヨブ 7:1～7    Iコリ 9:16～23    マコ 1:29～39

### 1. マコ

カファルナウムの会堂での説教の後、イエスと弟子たち一行はシモン・ペトロの家に行きました。マルコ福音書の記事の中にはペトロの名が20回ほども出ていて、この福音書とペトロとの間の特殊な関係を思わせます。その上今朝のテキストからは、あるいはイエスが一時ペトロの家に宿を借りておられた時期があったのではないかと想像されます。そのペトロが、イエス・キリストの地上の歩みと十字架の死を越えての復活と昇天によって啓示された福音を、どのように宣教したかを、私たちは今朝のテキストから聞かされるのです。

イエスがいろいろな病人や悪霊に取りつかれている人たちをいやされたので、町中の人が集まって来ました。朝早く、人里離れた所へ出て行って祈っておられるイエスの後を追って来た弟子たちに、イエスは次のように言われたと述べられています。

v.38 「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、私は宣教する。そのために私は出て来たのである。」

ペトロを始めとする初代教会の使徒たちは、イエスの地上の歩みと働きを“宣教”の起源として理解しました。言うまでもなくその“宣教”とは、使徒たちがそのために命を懸けている現在の“教会の宣教”であって、決して過去の“思い出の中の宣教”のことではありませんでした。“使徒たちの宣教”に先だって、それとは区別された“イエスによる別の宣教”があったなどというような理解は、マルコ福音書の著者にとっては全く想定外のことであったに違いありません。神の国の福音の宣教に伴って、イエスによる病人や悪霊に取りつかれた人たちのいやしがあり、使徒たちによる奇跡があったと記録されているのは、それが“共に働く神からのしるし”(16:20)と理解されたからでありました。

### 2. Iコリ

福音の宣教は教会に委ねられた務めであって、イエスの出来事に起源して現在に至り、主の再び来られる日まで続くものと使徒たちは理解しました。復活された主は、「私は世の終わりまで、いつもあなたがた(の宣教)と共にいる」(マタ 28:20)と言われたと、使徒たちは証言しています。使徒たちは教会を、“共に福音にあずかる者”(v.23)、“共に(神の国の)恵みにあずかる者”(フィリ 1:7)と考えました。ですから使徒パウロは、テサロニケの教会に送った手紙の中で言いました。「私たちの主イエスが来られるとき、その御前でいったいあなたがた以外のだれが、私たちの希望、喜び、そして誇るべき冠でしょうか。実に、あなたがたこそ、私たちの誉れであり、喜びなのです。」(Iテサ 2:19-20)

その福音は“十字架の言葉の福音”(Iコリ 1:18)であり、“神の秘められた計画を宣べ伝える福音”(Iコリ 2:1)であって、主イエスは「(この福音への)信仰の創始者また完成者」(ヘブ 12:2)に外なりません。

歴史の教会が、自らを使徒継承の教会であると宣言出来るとすれば、それは使徒たちと共に「そうせずにはいられない」(v.16)「福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです」(v.16)「福音のためなら、わたしはどんなことでもします」(v.23)と、本心で叫んでいることによるのです。ですから現代の教会もまた、そのような福音宣教へと招かれていることに目覚めなければなりません。

聖書を通して使徒たちが伝えた神の国の福音を聞き、天上のキリストが私たちをその同じ福音の宣教へと招いておられることに目覚めるキリスト者は幸いです。イエスの出来事に起源して現在に至り、主の再び来られる日まで続く福音の宣教は「神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いている」(Iテサ2:13)からです。

### 3. ヨブ

病気や悪霊による苦しみからいやされたシモンの姑も町の人々も、そのことによってイエスから始まった神の国の福音の宣教に参加する者となったのでした。

ヨブの叫びは、イエスのいやしによって解決されはしませんでした。

v.7 「忘れないでください。わたしの命は風にすぎないことを。」

イエスによるいやしは、彼らが共に福音にあずかるようになるためでありました。福音から切り離されたただの癒しは、人を救うことはありません。「そこで神は、(福音の)宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです」(Iコリ1:21)とある通りです。

ヨブの叫びは、主の再び来られる日まで続く福音の宣教へと招かれているすべての人の、ありのままの姿を暴露します。神だけが、キリストの福音だけが、神の国の福音だけが人を救うことに目覚めるキリスト者は幸いです。その福音は“十字架の言葉の福音”(Iコリ1:18)であり、“神の秘められた計画を宣べ伝える福音”(Iコリ2:1)であって、復活された主が「私は世の終わりまで、いつもあなたがた(の宣教)と共にいる」(マタ28:20)と約束してくださっているのですから。 ハレルヤ、アーメン。

## 2月12日 年間第6主日

創 3:16～19    Iコリ 10:31～11:1    マコ 1:40～45

### 1. マコ

vv.40-42 「さて、重い皮膚病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、“御心ならば、わたしを清くすることがおできになります”と言った。イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、“よろしい。清くなれ”と言われると、たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。」

「御心ならば」とは、文章の上では“もしあなたがそうしようと思えば・・・、あなたにはそれがお出来になる”という意味です。しかし、イエスは御自分の方からわざわざこの人のところに来られたのだという理解が、この物語りの背後にあるように思われます。

イエスの宣教には、病人や悪霊に取りつかれた人たちのいやしが伴いました。それは「神がご一緒だったから」(使 10:38)と説明されています。福音の宣教によって救いに入れられた多くの人たちと並んで、イエスの奇跡や癒しだけを重視した人々がいたのも当然です。しかしそれは福音の適切な理解から離れているということを、この物語りは主張しました(ルカ 4:23-30 参照)。イエスは福音を宣教するために、その福音によって人々が救われるために(Iコリ 15:2)、御自分の方からわざわざ来てくださることを証言したのです。

このイエスの“御心”を理解することは、初代教会以来の信仰訓練の課題でありました。現代の教会は再びそのことを思い起こさなければなりません。

### 2. Iコリ

福音の宣教は、外の世界に向かってのものであると同時に、それと並んで教会の内向きのものであることを、見落としてはなりません。私たちの経験では“信仰訓練”とか“教会訓練”という言葉は、これまで過去の遺物のように扱われて来たのではないのでしょうか。「人々を救うために、自分の益ではなく(教会内の)多くの人の益を求めて」(v.33)という、共にミサをささげる同信の友への福音宣教の大切さを、これまでの教会は軽んじて来ました。

どこの教会でも通常“福音を分かち合う会”とか、教理や聖書を“学ぶ会”というものがあります。しかしその実体は、単なる素人の“感想を語り合う会”や“個人的意見や主張の会”でしかないことを、私たちは知っています。福音によって私たちが救われるために、御自分の方からわざわざ来てくださるイエスの宣教を、聖伝と聖書を通して聞いて信ずるということから遠く離れていた20世紀の教会で、私たちは育った世代なのです。

キリストは、私たち教会のただ中に、私たちすべての者の罪と反逆によって十字架につけられた方として、共にいてくださるということが、福音であり、力強く示される“イエスの御心”であることを、今日も聖伝と聖書を通して使徒たちは証言し続けています。「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者の

ために罪を償う供え物となさいました。」(ロマ 3:25) これが私たちが祭壇で記念する御聖体のキリストです。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛して、私たちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」(Iヨハ 4:10) その愛と恵みに信頼して、私たちはいわば自らの信仰宣言として、「御心ならば(もしあなたがそうしようと思ってくださいならば)」とすることが出来るのです。

それとは反対に、自分は癒されて健康になった、罪から解放されて自由な者になった、自分は罪のない清い人間になったなどと大いに主張して、イエスの御心である御国の福音の宣教(マコ 1:38-39、マタ 4:23) そのものには無関心な人々のかたわらを、主は通り過ぎて行かれます。

### 3. 創

「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。……お前は生涯食べ物を得ようと苦しむ。……土に返るときまで」とは、創世記が描いた人間の罪と悲惨の姿でした。テキストの形式としては“原因物語り”を利用しつつ、現実の深層に迫る救済史的観点からなされた叙述を、私たちはここに見ることが出来ます。

人類の歴史は当然、これらの悲惨との葛藤の歴史でありました。各時代の知恵が、それらの悲惨の軽減のために用いられて来ました。特に近年の科学の進歩がそのために果たした貢献は大きいのです。しかし、現象としての悲惨がどれほど軽減されても、聖書が語る人間の罪の現実への唯一の解決は、神からの福音、キリストの福音による以外にはありません。

聖書の物語りをただの神話や昔話のように考えている人には理解出来ないことですが、このテキストは「死んだ方、否むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、執り成してください。」(ロマ 8:34) 私たちの現実の姿なのです。この罪と悲惨の現実の中にある私たちに、今朝もキリストは聖書朗読台と祭壇を通して憐れみ深く出会ってくださいます。「我が主よ、もし私があなたの前に恵みを得ているなら(御心ならば)、どうぞ僕を通り過ぎさないでください」(創 18:3 / 口語訳)と、心を合わせて祈ろうではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

## 2月19日 年間第7主日

イザ 43:18～25    IIコリ 1:18～22    マコ 2:1～12

### 1. マコ

vv.9-10 「中風の人に、“あなたの罪は赦される”と言うのと、“起きて、床を担いで歩け”と言うのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」

旧新約聖書を通じて一貫して語られている主題、それも中心的主題の一つが“罪の赦し”であることを知りましょう。キリストの福音も“罪の赦しの福音”であり(エフェ 1:7、ロマ 3:23 他参照)、それによって異邦人がユダヤ人と共に“約束”に与る“秘められた計画”が、“聖なる者たち(キリスト者)に明らかにされた”(コロ 1:26-29)と、使徒たちは宣教しました。

しかし、いつの時代にも教会の中には“霊の人”と並んで多くの“肉の人(自然の人)”たちがいました。それは事実であって、新約聖書の諸文書はそのような実状を前提としています。「自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊によって初めて判断できるからです」(Iコリ 2:14)と、使徒パウロは言いました。

今朝の福音書のテキストの v.5 後半から v.10 前半までの部分を取り除いてみると、同じイエスの御業に対する“肉の人”の見方が見事に再現できるのです。“罪の赦し”が理解できなくても、そこには十分に素晴らしいイエスの奇跡がある……。しかしその見方は、なぜ神が御子を「その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさった」(ロマ 3:25)のかを、全然説明できません。現代のキリスト教がどちらの側に近いのか、私たちは考えてみる必要があります。

### 2.

率直に言って、現代人はドグマとしての“罪の赦し”ではなくて、もっと身近に体感できる“癒やし”とか“温かさ”“自分へのご褒美”などと呼ばれるものを求めています。教会の側にも、そのような求めに対応できるようにキリスト教とその福音を再構築することが現代の急務であると、そう考える人が多いように思われます。すでにかなり以前から、各小教区でその教勢の衰退に対処するために工夫されて来たのは、そのような発想による小手先の試みの数々でありました。ドグマを語ることは“易しい”けれども、我々はもっと困難なことに取り組んでいるのだ……。と、私たちは自己弁護して来たのではないのでしょうか。

しかし、もし教会が今なお自らの存立の根拠を“使徒継承”にあると主張するなら、新約聖書の次の言葉を思い起こす必要があります。「たとえ私たち自身であれ、天使であれ、私たち(使徒たち)があなたがたに告げ知らせたものに反する福音を告げ知らせようとするならば、呪われるがよい。」(ガラ 1:8) すべてのキリスト者は、第二バチカン公会議の指針に従って、自ら聖書に親しんで神のことに熱心に耳を傾けることを、もう一度真剣に考えるべきです。聖伝と聖書によって“使徒たちから伝えられたこと”を、もし真面

目に学ぼうとしないなら、キリスト教はひたすら崩壊の道を進むことになるからです。

### 3. II コリ

v.20 「神の約束は、ことごとくこの方において“然り”となったのです。」

この“神の約束”は、異邦人がユダヤ人と共に“約束”に与る“秘められた計画”のことであって、そのために神はキリストを、「その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさった」(ロマ3:25)ことを理解しましょう。v.22で「神はまた、私たちに証印を押して、保証として私たちの心に“霊”を与えてくださいました」と語られているのは、聖霊が「私たちが御国を受け継ぐための保証である」(エフェ1:14)からです。このように“罪の赦し”と“神の約束(秘められた計画)”こそは福音の中心的主題であります。

今朝の朗読配分を通して、神は現代のキリスト者に向かって語りかけておられます。

「見よ、新しいことを私は行う。今やそれは芽生えている。あなた達はそれを悟らないのか。……わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたの背きの罪をぬぐい、あなたの罪を思い出さないことにする。」(イザ43:19,25)

医療や援助も、福祉やカウンセリングも、困難でしかも大切なことなのですが、しかしそれは“人の業”であって、必ずしも宗教に関係なくどこの国でも取り組まれている社会的課題です。しかし“罪の赦し”は、イエス・キリスト以外の誰も与えることの出来ないもの……、“癒やし”とか“温かさ”“自分へのご褒美”などと呼ばれるものとは似て非なる“神の業”であって、福音の中心的主題はこれなのです。

“21世紀の教会よ、キリストの福音に立ち帰れ。そうすれば、再び迷い出ることはない”(エレ4:1)と呼びかけておられる主の御声が聞こえて来るではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

## 2月26日 年間第8主日

ホセ 2:16～22    II コリ 3:1～6    マコ 2:18～22

### 1. マコ

v.22 「新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ。」

“新しい宗教には新しい歩み方がある”とか、“新しい時代には同じキリスト教にも新しい歩み方があるべきだ”というような主張に、このテキストはしばしば利用されて来ました。確かに言葉の上ではそれは至極順当な解釈なのですが、しかし初代教会において使徒たちが宣教した福音の中では、このテキストはより明確に“その宣教と共におられる復活のキリスト(マタ 28:20、マコ 16:20)”と結びつけて理解されていたと考えられます。その宣教が使徒とその後継者たちによって行われているとしても、宣教の真の主体は復活のキリスト御自身であるとの確信が明確であったことに、私たちは注目しなければなりません。

歴史の教会はその旅路において、自らを“一・聖・公・使徒継承”という基準によって逸脱から引き戻すことを繰り返して来ました。それは時としては激しい改革の戦いとして、異端を排除するものともなり、キリスト教の分裂の原因ともなったことを、私たちは知っています。そして第二バチカン公会議が現代の教会に負わせた刷新の課題は、私たちにとって今なお非常に大きな課題であり続けています。

それでは、復活の主が使徒たちに命じて教会に委ねられた宣教とは何か。それは、使徒言行録にある使徒ペトロの説教に明確に述べられています。「そしてイエスは、御自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようにと、わたしたちにお命じになりました。また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しを受けられる、と証ししています。」(使 10:42-43) それは使徒パウロがテサロニケの教会に宛てて送った手紙からも明らかです。「この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。」(I テサ 1:10)

新しいぶどう酒とはこの“使徒たちから始まった宣教”であり、新しい革袋とは使徒継承の教会に外なりません。

### 2. II コリ

使徒パウロは神が自らとその同労者たちに、“新しい契約に仕える資格”(v.6) を与えてくださったと言っています。そしてそれをさらに説明して、“霊に仕える務め(3:8)”、“人を義とする務め(3:9)”、“永続するもの(3:11)”と述べました。使徒たちの宣教によって人々が終末の裁きの日まで永続する罪の赦しを受けたのであれば、その赦しの福音に生きている教会は、使徒たちが本物であったことを証明するいわば推薦状であります(v.2)。 そう確信していたので、使徒パウロはテサロニケの教会に対しても次のように書き送りました。「わたしたちの主イエスが来られるとき、その御前でいったいあなたがた以外のだれが、わ

たしたちの希望、喜び、そして誇るべき冠でしょうか。実に、あなたがたこそ、わたしたちの誉れであり、喜びなのです。」(Iテサ 2:19-20)

現代の日本の教会が、確かに“使徒継承”によつて立っているとすれば、司教の推薦状はその教区であり、各司祭の推薦状はそれぞれの司牧する小教区であるということになります。司教とこれに従属する司祭たちは、彼らの宣教と共におられる復活のキリストから、“霊に仕える務め(3:8)”、“人を義とする務め(3:9)”を委ねられた人々なのです。彼らは“宣教という愚かな手段によって……十字架につけられたキリストを宣べ伝える(Iコリ 1:21-23)”のために叙階されました。

しかし、私たちが知っている現代の教会の実状は、“使徒たちから伝えられたこと(神の啓示に関する教義憲章 8)” からかなり大きく逸脱してしまっていると言わざるを得ません。司教と彼に従属する司祭が教会を育てました。しかしその司教や司祭を生み出したのは私たちの教会ではなかったでしょうか。ですから私たちは、教導職も信徒も共に、御言葉に従って悔い改めなければなりません。「だから、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて始めのころ(使徒たちの時代)の行いに立ち戻れ。」(黙 2:5)

### 3. ホセ

現代の教会に、御自身の死と復活によって新しい過越を実現してくださったイエス・キリストによって、賛美をささげましょう。神の国に至る“正義”、神の救済史における“公平”を、「恵みにより、信仰によって」(エフェ 2:8)与えてくださったのですから。「実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。」(ロマ 10:10)

教会は人間の知恵や工夫によって新しくなるのではなくて、使徒たちから伝えられた福音、復活の主が共にいてくださる宣教によってだけ、真の新しい革袋になることを、歴史の教会は繰り返し思い起こして立ち帰らなければなりません。“宣教という愚かな手段によって……十字架につけられたキリストを宣べ伝える(Iコリ 1:21-23)” 教会を造り上げることは、21世紀の教会に課せられた刷新の課題です。

ハレルヤ、アーメン。